

# 脱藩

蟠龍飛騰  
龍馬脱藩の謎に迫る、空白の一二〇日



この物語は大城戸圭一（愛媛龍馬の会前会長）が二〇一二年に愛媛新聞サービスセンター刊で上梓した『蟠龍飛騰』を原作とし、新たに加筆したものである。大城戸圭一の龍馬への深い尊崇の念と綿密な調査に基づき登場人物は実名であり、可能な限りの史実を辿るが、そこに刻まれない空白の溝を仮説・創作で埋めたものである。

大城戸圭一は高知に生まれ、少年時代に愛媛に移る。心情は紛れなき土佐人であるが、終の棲家を愛媛と定めた。蟠龍であった龍馬が、飛騰するに至る足がかりとなった伊予国・愛媛への足跡を、大城戸は自らのルーツを辿るように旅をした。

目次

序 10

蟠の章 瑞山の密書 12

地の利は人の和に如かず

十月十二日

土佐藩 高知城 12

二両と、田村蕪と鯨の煮付け

十月十四日

高知柴巻の郷 20

吉兆の柴巻

十月十五日

高知柴巻の郷 26

木屋岩吉屋敷、松の格子天井

十月十五日

立川番所 32

紫蘭俊英の交わり

十月十七日

丸亀藩鷹匠町 39

どぜう鍋

十一月六日

丸亀藩鷹匠町 46

龍の章 好学の気風、大洲藩

50

鯨の煮付けと恋物語

十一月七日

天領川之江 50

紺屋おせい

十一月八日

西条藩 紺屋町 59

小松藩のいずみや なだやみやうちけ	十一月十二日	西条藩	賀茂川	68
灘屋宮内家の気風 されだに	十一月十五日	大洲藩	郡中	83
佐礼谷のお由 あゆだし	十一月十七日	大洲藩	佐礼谷	97
鮎出汁の芋炊き	十一月十七日	大洲藩	阿蔵	108
名物ぬか漬けとひゆうがめし	十一月二十二日	宇和島藩	宇和	118

飛の章 伊達宗城

134

加尾と佐那 かお さな	十一月二十七日	宇和島藩		134
密命 みつめい	十一月二十七日	宇和島藩		138
勿頸の交わり ふんけい	十一月二十八日	宇和島藩		152
また会う日	十二月九日	宇和島藩	浜御殿	165
九絵鍋の夜 くえなべ	十二月九日	宇和島藩	町会所	186
龍馬、発つ	十二月十七日	宇和島藩		197
きぬかつぎ	十二月十八日	城川郷		203
お袖狸に化かされる そでたぬき	十二月二十一日	松山藩		214
道後の湯に、浸る	十二月二十三日	松山藩		231

騰の章 紺碧の空 240

鮎屋ふなやで迎える新年

一月一日

松山藩 240

男児志だんしこころざしを立てて郷関きょうかんを出す

一月四日

周防国大島郡 246

お琴との小旅行

一月五日

岩国藩 柳井 256

身はたとひ

一月八日

岩国藩 呼坂 262

萩往還はぎわうかん

一月十日

萩往還 269

薩長土連合密議さつちやうどれんごうみつぎ

一月十四日

萩藩 鈴木勘蔵旅館 277

決断

一月十五日

防府 岡本屋敷 290

瑞山の書斎

二月一日

土佐藩 297

脱藩

三月二十四日

高知 和霊神社 302

あとがき 308

原作者 大城戸圭一の書簡 310

附記 314

- 一、昭憲皇太后の夢枕に立った龍馬 314
- 二、日本海海戦と島村速雄と秋山真之 315
- 三、坂本直道、もうひとりの龍馬 319
- 四、宇和島の盟友たち 322
- 五、松山を変えた男、小林信近追記 334
- 六、伊予八幡追記 336
- 七、朝敵となった松山藩 338
- 八、来世に奉還の檄文 340

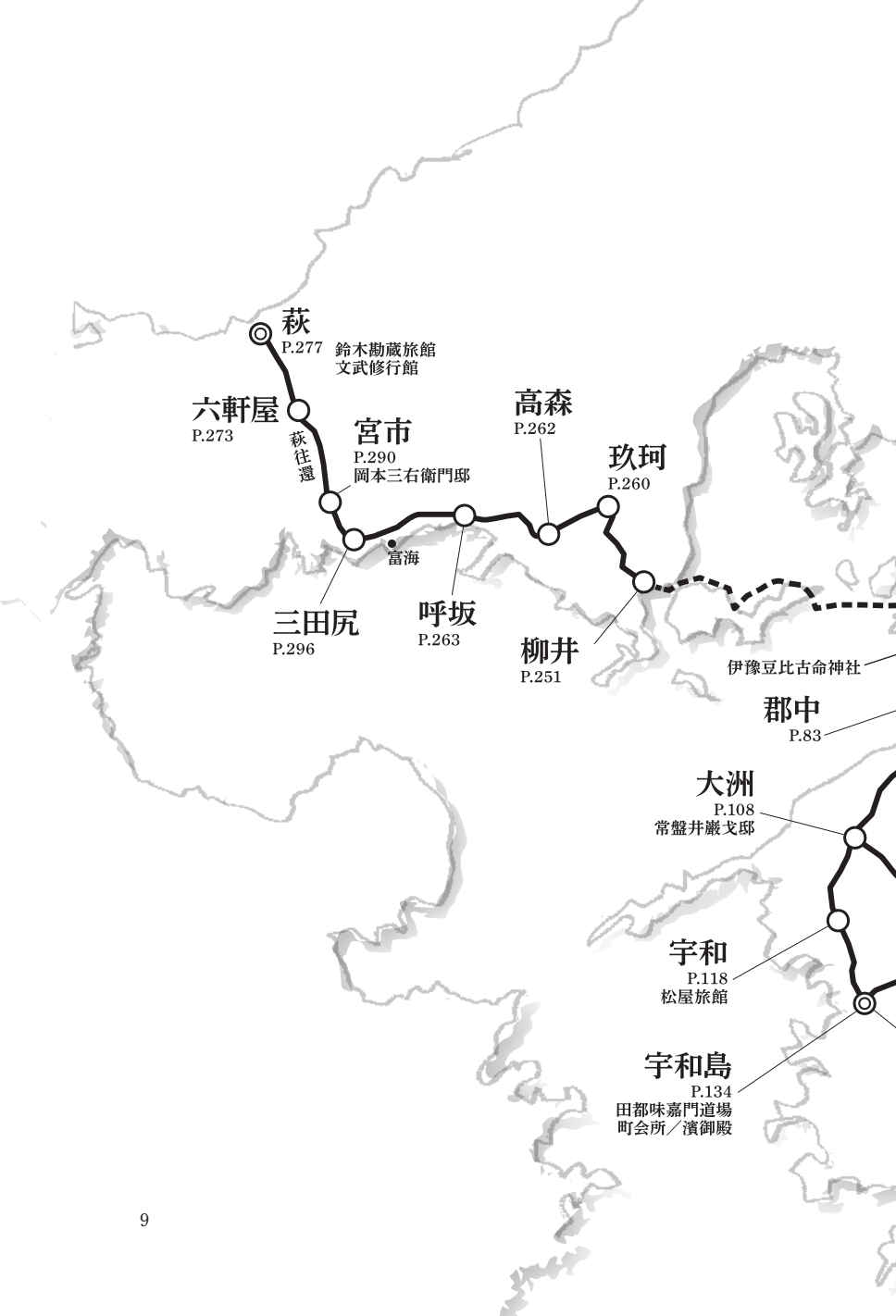
年表【元号・西暦適合表】 347

# 脱藩

地図で追う目次







萩  
P.277  
鈴木勘藏旅館  
文武修行館

六軒屋  
P.273  
萩往還

宮市  
P.290  
岡本三右衛門邸

高森  
P.262

玖珂  
P.260

三田尻  
P.296

呼坂  
P.263

柳井  
P.251

伊豫豆比古命神社

郡中  
P.83

大洲  
P.108  
常盤井巖戈邸

宇和  
P.118  
松屋旅館

宇和島  
P.134  
田都味嘉門道場  
町会所／濱御殿

## 序

### 「脱藩」

それは家を棄て、国を棄て、主君を見限るものであり、赦されざる裏切り行為である。幕府は南宋時代の朱熹しゆきによって完成された孔孟こうもうの原意げんいを汲む儒学の体系である朱子学しゆしがくを官学とし、強固な武士社会を築いていた。

朱子学の説く道徳の規範からみて、また藩政の堅持からみても「脱藩」が重罪とされるのは当然である。追手が放たれる場合も多く、家名は断絶・闕所けつじよ、本人ばかりか一族郎党に至るまで累を及ぼすもので、切腹など死罪に刑されることもあった。それを知らずに脱藩をする者などはいまい。ではなぜ坂本龍馬は脱藩せずいられたのか。その脱藩に至る思いの形成過程は、どのようなものであったか、歴史書にない時間の空白を解き明かし謎に迫りたい。また組織や集団の特性と個のありようなどについての考察の一助になれば、脱藩という行為から見えてくるものがあると思う。

この物語を書くにあたり、わたしは高知市柴巻しばまきにある田中良助郎を訪ねた。

秋晴れの日曜日。遠く太平洋が光り高知市内も手に取るように見えた。ここがこの物語の原点というわけではないが、屋敷の前の良く手の入った畑に青々と葉をつけた蕪かぶを見て、時間の概念が揺らいだ。

「もうすぐ龍馬さんが、この坂道を登ってやって来る」

確かに、そう感じたのだ。土佐に暮らす人たちは、いまもそのように先人の気配を身近に感じているに違いあるまいと思う。それが土佐人の生きざまなのだ。ならばわたしもここから旅を始めるとしよう。

文久元年、西暦一八六一年十月から物語を書く。時は幕末の諸論がかまびすしい混乱期だ。論は命をもって贖うのか。

明治維新まで七年。すなわち龍馬が凶刃に斃れるまで六年。このわずかな歳月を、かくも濃密に駆けさせたその原動力はなにか。龍馬にそこまでの思いに至らせたのは、誰だったのか。どのような思想形成の日々を過ごしたのか。

原作者の大城戸はこう記した。

「龍馬は、宇和島に行ったあと松山まで戻った。そして瀬戸内海を渡り長州萩に久坂玄瑞を訪ねている。そののち土佐に帰り一ヶ月もたらず脱藩した。この旅が龍馬に脱藩を決意させたと考えている。土佐藩士から日本人に変わる龍馬の思想変容の旅の中で、誰に会い、何を考えていたのかに想いを馳せたい」

龍馬二十七歳、脱藩直前の文久元年十月十四日から文久二年二月末日までの間の、やむにやまれぬ「思い」に至る一二〇余日を共に旅をしたいと思う。

## 蟠の章 瑞山の密書

文久元年（一八六一）、十月十二日 土佐藩 高知城三の丸

地の利は人の和に如かず

高知の城下には多くの川が東西に流れている。さらにその川から町筋に石組みの水路が引かれており、生き生きとした水が生活の傍までやって来ている。まことに考えられた城下である。それは生活用水であるだけではなく、雨の多い土佐の水害防御の構えでもある。その証拠に目の前の高知城は豪雨で濠が溢れるのを防ぐためにいくつかの手立てが施してあった。なかでも特筆するのは見事に組まれた石樋ではないだろうか。

城内の二の丸、三の丸に降った雨水を集めると、その石樋から勢いよく排水するのである。石垣に雨水が浸み込むと石垣は緩み弱くなり崩壊する。しかしその水をそのまま町に溢れさせるわけにもいかず、いくつもの水路を張り巡らせ分散させ城も生活も守っている。

丁寧に組まれた石垣の水路の姿は美しく、大雨さえ降らなければ生活には快適だった。たとえば夏の暑い日は、水路を渡る風で冷やされた空気が邸内に流れ込み涼を得るし、子供たちは流れに足を浸けて遊び、西瓜や夏野菜を冷やしていたりする。

そこはまた学びの場にもなる。生活の水であろうとも、水は決まって高い方から低い方へと流れる。上流と下流という事であり、上流に住む者は下流の人々に気を遣い、水を汚さないように

丁寧に水利用をする。下流の者は、その水の恵みもたらされることから上流に暮らす人々の氣遣いに感謝する。つまるところ、ものの上下関係とはそうあるべきである。互いに慮つてこそ豊かな社会が実現する。たかが水路からでもそれを学ぶのである。

ところで石垣に水が浸み込むと緩み崩壊するとは、石垣だけの話ではない。

強固な組織にもその目地、つまり人々の関係性に異論が入り込むと、その関係は緩み、やがて崩壊をする。

土佐藩家老福岡宮内の持論でもあつた。

追手門の前で立ち止まった若い侍は、木造渡櫓に本瓦の葺かれた櫓門の鯨戈を見上げた。

その侍は身の丈は五尺八寸ばかり、総髪にして目にはたおやかな人懐っこい光を湛えている。追手門の門衛がその男を不審そうに眺めていた。

すると男は門衛に頭を下げ、すつと歩み寄つて来た。

「家老福岡さま預かり郷土坂本権平が弟、坂本龍馬と申します。家老の福岡宮内さまがお召しということで参上仕りました」

門衛は、その郷土風情が何の用がご家老に、と不審に思い

「しばし、待たれいよ」

ぞんざいな口をきいて城内の詰門に居る上役にまで報告に行つた。

龍馬は追手門から城の威容を眺めた。青天に白い天守がすつと立ち、廻縁高欄がひとときわ印象

的で美しく潔い。天守の屋根に飾られる鯨戈は、追手門のそれが瓦で出来ているのに比して青銅製の細工物だ。見事な芸術品のように見える。鯨戈とは顔が龍で身体は棘とげの生えた怪魚なのだ。こうした想像上の生物は面白いものだと眺めていた。やがて門衛は案内係の侍を伴って戻って来た。

「坂本さんかえ。案内いたす。ご家老さまが、三の丸のご書院まで参るようにとのことやきの」  
「ご書院にですらうか」

丁寧ていねいに頭を下げ、その男に従った。

龍馬は、この夏に結党した土佐勤王党きんのうとうの盟主である武市瑞山たけちずいざん（半平太）に頼まれ、長州萩の久坂玄瑞くさかげんずいに密書を運ぶこととなっていた。そこで名目を剣術詮議と記し、二十九日間の「藩暇はんげま願ねが」を出していた。つまり藩外に出る許可を申請していたのである。

龍馬も、その久坂という男に会ってみたかったのだ。藩暇願いで長州まで行くのは大きな問題だろうという事も理解はしていた。しかも手続きは家長である兄の権平が、福岡家御預おあずかりという身分ゆえ所属する家老職に願ひ出たものであった。つまり連座制なのであり、龍馬の行動はすなわち兄の行動である。さらに言えばその家老にまで累が及びかねない仕組みである。

届出は昨日に裁可され、権平に下げ渡されていた。ところが兄が言うには  
「明日の朝に登城し、福岡さまのところに挨拶に参れとのことじゃ」

兄の顔は曇っていた。

「ほう。なんでするう。ご家老さまが直にですか」

「ほうじゃ。わしは心配でならんが、付いて行くいうがものう」

「大丈夫やき。ちゃんとして挨拶しちよきますき」

そんな話だったのだ。

三の丸の門は黒鉄門であった。山内家の土佐柏紋が鑄抜きで嵌められ、厳めしいが風格がある。空気はいきなり重々しくなり、門衛も書院藩士に代わる。

「こちらがご家老さまに呼ばれ登城した坂本某じゃ」

そう言つて引き渡された。

「ではこちらに」

案内されるまま、細かく砕かれた白い小砂利を踏めば、小石のきしむ音が気持ち良かった。

「いこでお待ちくだされ」

書院脇の広い廊下の片隅に、面談者用なのだろうか、やや広い待合があった。

そこに座ると長い廊下の外に美しい庭園が見える。黒松に白砂そして景石が配され苔が生して武家らしく曖昧さの無い見事なものである。これを来客に見せて緊張を誘うのかもしれない。

なんと、そこにご家老である福岡宮内が回り廊下からやって来た。

「おう。おんしが坂本龍馬ちゅうがかえ」

「はい」

「福岡じゃ」

そのような軽い挨拶のようなことで話が始まった。

※この続きは実際の本書にてお楽しみください。